

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

ジョルジュ・サンド 「埃の妖精」：解説と翻訳

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平井, 知香子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006355

ジョルジュ・サンド「埃の妖精」

—解説と翻訳—

平井 知香子

はじめに

「すべては埃から生まれ、埃に帰る」この不思議なテーマをめぐる一遍の童話がある。19世紀フランスの作家ジョルジュ・サンド(1804-1876)が孫娘のために書いた「埃の妖精」“La Fée Poussière”がそれである。1875年7月に書かれたこのコントは、同年8月に『ル・タン』紙 *Le Temps* に発表され、のちに童話集『祖母の物語』*Contes d'une grand-mère* の中に収められた。1878年のカルマン・レヴィ版の再版であるジョルジュ・リュバン Georges Lubin 版 (Edition d'Aujourd'hui) では下巻に入っている。「埃の妖精」はこれまで童話集の中の一編として語られることはあっても、それ以上の取り扱いはなされなかった。しかし、この小品の中にこそサンドが晩年に到達した心境を読み取ることができるのではないか。このような観点から、サンドの「埃の妖精」とは一体何なのか、なぜこのような童話が書かれたのかを考察してみたい。

I 風

オーロール版 *Contes d'une grand-mère* の編者フィリップ・ベルチエ Philippe Bertier の解説によると、自筆原稿はどこにあるか不明であるが、パリの図書館 la Bibliothèque historique de la ville de Paris は、関連の自筆テキストを所有している (Fonds Sand, cote 069)。このテキストは「風。埃の妖精」“Le Vent. La Fée Poussière” というタイトルで、次の文から始まっている。

かわいいおちびさんたちや。わたしがとてもとても若かった時、わたしは風とすごく仲良しでした。わたしはみんなの友達であるちいさい西風 Zépyr や、あらゆる年齢のひとに

快い親切なそよ風のことを話すではありません。すずめや子供の髪の毛を逆立たせたり、人々や木々をうるさがらせ、いらいらさせる荒々しい大きな風の話をして。わたしは神話の中でエウリュース Eurus という名前のあの風のことを読んだことがありました。¹⁾

実際はこのテキストは日の目を見ずに終わってしまった。なぜなのであろうか？この点について少し検討してみよう。まず、一行目の「かわいいおちびさんたちや、わたしがとてもとても若かった時、わたしは風と仲良くしていました」という書き出しについては、『祖母の物語』の他のコントと同様の語り口が認められる。祖母サンドが孫娘のオーロール Aurore(1866年生まれ)とガブリエル Gabrielle(1868年生まれ)にお話を語っているときの語り口をそのまま取り入れたものである。このスムーズな導入部については、話を続けるにあたって、あまり問題がないように思われる。次に風であるが、「風」と「埃」との結び付きについては、「風が埃を立てせる」(Le vent soulève la poussière.)という表現が一般に使われるように、ごく自然なものであり、サンドがこの二つをタイトルに使用しようとしたことはなんら不思議ではない。引用に見るように、西風 Zéphyr は「みんなの友達」であり、やさしい微風は「あらゆる年齢の人にも快い」と定義し、今度はそのような穏やかな風ではなく、「子供たちの髪を乱し、人々や木々を悩ませいらいらさせる大きく偉大な風」のことを話すつもりであった。そこで神話の中で読んだことのあるエウリュース Eurus という名前の風を登場させようとしたのであった。にもかかわらずサンドはこの計画を放棄してしまった。オーロール版の編者フィリップ・ベルチエはこれに関して、「花のささやき」ですでに風は登場したので、同じことの繰り返しはさげ、新しい自然の要素に興味をいだいたのであろうと述べている。ベルチエのこの説をさらに検討するために、まず「花のささやき」において風がどのように描かれていたかを見てみよう。

「花のささやき」“Ce que disent les fleurs”(1875年、7月14日『ル・タン』*Le Temps*紙に発表)は「埃の妖精」の直前に発表された作品である。「花のささやき」の後半部分において、西風は語り手であり、擬人化された登場人物の役割も果たしている。まず後半のあらすじをおってみると次のようになる。

西風 Zéphyr は最初、嵐の王様の長男として破壊を繰り返していた。風はある日、地上に咲く一本のバラの花に出会ってその匂いに魅せられる。破壊的行動をやめた風は、バラの花を懐に抱いて空に飛び立ち、黒雲の宮殿に戻る。天空に昇ったため、しおれ始めたバラの命を助けてくれるよう西風は父に懇願する。父は憐憫を知った息子に怒り、風の手からバラをもぎとると、その花弁ははらはらと空中に散っていった。父の怒りにふれた風は羽を失って地に落とされる。森の中で風はバラが再び生き返ったことを知る。生命の精 l'esprit de la vie は翼を失った西風 Zéphyr に蝶々に似た羽を与える。そよ風となった Zéphyr は今後地上の友として、人間や動物や植物の間で自由に暮らすことになる。このように「花のささやき」の風は愛と死と

再生の物語の主人公であった。

前記のテキスト「風。埃の妖精」で明らかのように、サンドはエウリュースという神話に登場する風に「大きく偉大な風」の特徴を与えようとしていた。では実際に風は「埃の妖精」の中でどのように描かれたであろうか？ 風は、金属の起源に関する妖精の説明の中に登場する。

わたしの友達の火が材料を空気の中に投げると、わたしのしもべの風が雲の湿気と電気の中にそれを運び、大地に吹きおろした後に、火はまたそれをとりあげ、再び焼き直し、結晶にし、あるいは固めたのです。（“La Fée Poussière”, p.158）

前述の「花のささやき」の西風は、嵐の王の長男として破壊を繰り返していた。すなわち西風は「破壊の風」であった。それにたいして、この「埃の妖精」の風は、火山灰から金属をつくる、いわば「創造の風」である。しかし両者は正反対の性格を持ちながら、いずれも荒々しく天と地を駆け巡るという点で一致している。結局サンドが神話から取り上げようとしていたエウリュースと、「花のささやき」で破壊を繰り返していた西風 Zéphyr とはあまりにも似過ぎていたのであろう。したがって、「花のささやき」のすぐ後の作品で、風を再び主要な登場人物として描くことはためらわれたのだと考えられる。ペルチエの言うように、「風」よりも、むしろ新たな性格を持つ「埃」の方にサンドの興味は移ったのであろう。こうして風よりも埃に重点が置かれることとなり、「風。埃の妖精」と題する書き出しの部分はしりぞけられ、「埃の妖精」というタイトルを持った新たなコントが書かれることとなったのである。

II 埃、妖精

『祖母の物語』中で、一番最初に書かれたコント「コアックス女王」“La Reine Coax”（1872）には一か所だけ「埃」に関連した場面がある。蛙の女王コアックスは、永遠の若さと美しさを手に入れようと、宝石を身に飾り踊り狂う。彼女は人間の美女に変身するはずだったが、虚飾に溺れ表面だけ取り繕おうとしたため変身の試みは失敗に終わる。そして、その蛙の死骸は気味の悪い黒いキノコとなり、風が吹くと、埃となってぼろぼろになってしまう。

その姿を見失った後、マルグリットは蛙の死骸を探してみましたが、ただ墨のように黒い気味の悪いきのこが見つかっただけで、それも風が一吹きすると、ほこりとなってくだけてしまいました。²⁾

このように『祖母の物語』のうち一番最初に書かれた「コアックス女王」において、サンドがすでに〈埃〉(poussière)という単語を使っていることに注目しよう。架線部のフランス語

にあたる“*tomber en poussière*”という表現は「風化する、ぼろぼろになる」という意味であり、ここではあきらかに風のイメージとともに、死のイメージと結びついていることが分かる。孫たちに聞かせる童話の中になぜこうしたイメージが用いられたかは、サンドがこれを孫への遺言として遺しておきたかったという事情が考えられる。その証拠に「ばら色の雲」“*Les nuages roses*”(1872)の最初には、孫娘ガブリエル・サンドにあてた次のような献辞がある。

ふたりともまったくだれの助けもなしに理解できるようになったとき、わたしはもうこの世にはいないでしょう。おまえたちのことが大好きだったおばあさんのことを思い出しておくれ。³⁾

この献辞の中でサンドは、幼いガブリエルに今は分からない単語があったとしても、来年になったら読めるであろう、また姉のオーロールに助けてもらいなさいなどと気遣っている。したがって、子供向けの童話でありながら、サンドは調子を決して下げることなく、埃の妖精を通して自分の死生観を静かに語っているといえよう。

では、「埃の妖精」とは一体何であろうか？ まず第一にサンドの故郷のペリー地方にはおびただしい妖精伝説が残っていた。子供の頃から妖精に強い愛着心を抱いていた彼女は『フランス田園伝説集』*Légendes rustiques*(1858)にそうした妖精に関する話を多く集めている。生まれ故郷の妖精伝説は代表作『愛の妖精』*La Petite Fadette*(1848)のヒロインのフッデットに取り入れられ、また『魔の沼』*La Mare au Diable*(1846)のマリも妖精の特徴を持った少女として描かれた。晩年の『祖母の物語』にもあちこちに妖精が登場する。そのひとつである「ピクトルデュの館」の前書きで、「問題は妖精がいるかいないか知ることです」と述べているほどである。サンドの妖精観については、古代の宗教ドルイド教や、少女時代の修道院での神秘的体験、それから当時流行の神秘思想などとの関連があげられる。したがって初期作品以来その傾向が認められるが、とりわけ中期にはドイツの幻想作家ホフマンや、宗教家ビエール・ルルーの影響を受けた作品がある。幻想小説『スピリディオン』*Spiridion*(1837)には地下埋葬所の殺人と輪廻転生が描かれることとなった。ではさらに「埃」について見てみよう？

「おまえがそこに見ているものはすべてわたしが作ったものです」と妖精はわたしにいいました。「それらはすべて埃でできているのですよ。雲の中でドレスの埃を払い落として、わたしはこの天国の材料を全部生み出したのです」(“*La Fée Poussière*”, p.155)

妖精は少女に「すべては埃からできている」ということを示すために、生物進化の階段を登り、世界が誕生するところから、現代の人間界にいたるまでの進化の歴史を見せる。そしてす

べては埃から生まれ、埃に帰していく、生あるものは死に、ふたたび妖精の手によって生まれかわると教える。ところで前述のように「コアックス女王」の最後で、自分の美しさを誇り外面を重んじる蛙は、肉体性を代表していた。その結果、蛙は埃となって消えてしまった。この結末は肉体は滅びたことを暗示している。他方、精神性を代表する白鳥のロランド王子は、日の光の中に飛び立って行く。この飛翔のイメージは精神が肉体から解放され自由になったと解することができる。すなわち蛙の死と白鳥の飛翔は、サンドの精神と肉体の二元論を暗示しているといえよう。サンドは初期作品以来、精神 *esprit* と肉体 *corps* の葛藤に悩み、『レリヤ』 *Lélia* (1833) の中でその深刻な悩みを表現している。この精神と肉体の葛藤のテーマをサンドはずっと持ち続け、晩年の童話作品の中でも取り扱ったと思われる。この精神と肉体のテーマは「埃の妖精」の中にも同様に見られる。

ね、いいかい、体と呼ばれているあの殻を脱ぎ捨てた精神にとって、ここはいい気分だよ。おまえが体をベッドに脱ぎ捨てると、おまえの精神だけがわたしと一緒にいることになる。
 (“La Fée Poussière”, p.157)

架線部の「体と呼ばれるあの殻を脱ぎ捨てた精神」という一節に見られるように、「埃の妖精」においても肉体に関する精神の優位性が感じられる。では人は死んで、肉体は滅びてしまうのか？ 肉体は滅びても精神だけは残るのか？ この問題についてサンドは彼女なりの解決策を見いだした。後述するように「埃の妖精」では精神と肉体の二元論はさらに一歩進化論の方向に向かって進むのである。

Ⅲ 死と再生

詩や小説の中でよく取り扱われる「風」に比べ「埃」はユニークである。妖精と結び付いた「埃の妖精」となるとさらに珍しく、他に例を見ない題材である。サンドが「埃」に興味を抱いたのはしかし、今回がはじめてではない。1821年、少女時代を過ごした修道院から故郷ノアンに帰ったサンドは、宗教書や哲学書を読み耽っていた。祖母の死に直面し、深刻に悩んでいた時期である。その時読んだジェルソン Gerson の『キリストのまねび』 *L'Imitation de Jésus Christ* の中に〈poussière〉という語がすでに見いだされる。⁴⁾ したがってサンドはごく若いころから「埃」という概念に関心を抱いていたといえよう。以前は、祖母の死に際して悩んだ時期に読んだジェルソンの「埃」であったが、今度は祖母となったサンドが自分自身の死に思いを致し、孫への遺言として死のイメージを「埃の妖精」に用いたのである。この死のイメージに再生のイメージが付加されるためには輪廻説と後述のダーウィンの進化論が必要となる。

埃の妖精は少女に生命の誕生の神秘と自然淘汰の歴史に触れさせていた。古代の怪獣たちが

虐殺を繰り返していると少女は憤慨するが、それにたいして妖精は生き物の抜け殻が肥料となって新たな生物に役立つこと、そして最初は貧弱であったものも、次第に環境に適応し改良されると説く。

わたしは芽を出させるために破壊の種をまき散らします。植物であれ、動物であれ、あるいは人であれ、どの埃についても事情は同じなのです。埃は生命を得た後、死にますが、それは何ら悲しいことではありません。わたしのお陰で死んだ後はいつも、ふたたび生命が始まるのですからね。さようなら。わたしの思い出を持ってほしいです。⁵⁾

すべては埃から生まれ、埃に帰る。それが物と人間の宿命である。すべてのものは生きたのも死ぬが、それは何も悲しいことではない。なぜなら「自然」という「妖精」のおかげで死んだ後、再び新たな生が始まるからである。埃から植物が発生し、植物から動物が発生し、動物から人間が発生する。こうして自然淘汰を繰り返しながら、すべては輪廻転生するのである。肉体か、精神かで悩んだサンドが見いだした答えは結局このような進化論をふまえた輪廻説であった。この進化論についてはフィリップ・ベルチエが指摘するように、サンドは明らかにダーウィンの Charles Darwin(1809-1882) の楽観的進化論の影響を受けている。⁶⁾ ダーウィンの学説である進化(種原、自然淘汰)論は darwinisme と呼ばれ、著書『種の起源』*De l'origine des espèces par voie de sélection naturelle*(1859) は、フランスでは1862年と1871年に翻訳、出版された。書簡集の中には、サンドが息子モーリスにこの本が貴重なものであるのでプレゼントしようとしたが、彼がそれをまだ受け取っていないので気掛かりであるという手紙がある。⁷⁾ また『備忘録』にも孫たちとダーウィンを読んでいる様子が記され、「モーリスと今晚お話ししたのはゴリラとチョウとダーウィン…」などの記述が見られる。⁸⁾ このように孫や息子とともに故郷ノアンで暮らす祖母サンドはすっかりダーウィンの進化論に魅せられていたのであった。

妖精は別れにあたって少女に「さようなら」「Adieu」と永遠の別れを告げる。そして「わたしの思い出を持ってほしいです」という。この言葉の中にサンドの本心を見ることができよう。「人間はあることに気づき始めました。学ぶべき唯一の主人、それが自然なのです。」「妖精」とはすべてを変化させる「自然」のことであった。少女が最後に妖精から手のひらに受け取った「うっすらと積もった埃」こそ、すべての生命の源であった。「ばら色の日の光の中に消えていく金色の雲」、このロマン主義的な夢想とともに、生命の源に自己自身を一致させることによってジョルジュ・サンドは涸れる果てることのない永遠の豊かさの思想に到達したのである。

結 び

ジョルジュ・サンド George Sand『祖母の物語』Contes d'une grand-mère の翻訳については、杉捷夫訳『祖母のものがたり』山の木書店、昭和24年(「ものいうカシの木」「バラ色の雲」「ビクトルデュの館」)をはじめいくつか版があるが、13のコントのうち邦訳されていないものは「勇気の翼」“Les Ailes du courage”、「巨人イエウー」“Le Géant Yéous”、「犬と聖なる花」“Chien et la fleur sacrée”、「埃の妖精」“La Fée Poussière”、「牡蛎の妖精」“Le Gnome des huîtres”、「大きな目の妖精」“La Fée aux gros yeux”の6編である。これらの作品が今まで邦訳されなかったのは、ドラマ性に乏しいとか、あるいは難解であるとかいくつかの理由が挙げられるであろう。今回取り上げた「埃の妖精」も、子供向けの作品としては難解な部類に属する。しかし、その難解さは、晩年のサンドがこのコントによって孫娘たちに悔いのない教育を施したいと考えていたことによるものである。若いころから神秘思想に興味を抱いていた彼女は、このコントの中でさらにそれをダーウィンの進化論にまで発展させていた。今回「埃の妖精」の翻訳を試みたのは、このようなサンドの最晩年の思想を読み解きたいと考えたためである。その結果、これまでほとんど理解されなかった「埃の妖精」は、実はジュラ紀の怪獣までもが登場する天と地の大スペクタクルであることが分かった。コンピューター・グラフィックを駆使した、恐竜映画などに慣れ親しんだ21世紀の子供には案外すんなりと受け入れられる作品ではないかという気がする。今後ジョルジュ・サンドの作品が数多く翻訳され、一日も早く正当な評価がなされることを願う次第である。

翻訳 ジョルジュ・サンド「埃の妖精」

こどもたちや、むかし、ずうっとむかし、わたしが若かったときのことです。小さいおばあさんがいて、戸口から追い払っても追い払ってもまたしつこく窓から入って来ると、人々が不平をいっていたのをよく聞いたことがあります。おばあさんはとてもほっそりしていて、とても小さく、まるで歩くというよりは宙に漂っているようでした。だから、わたしの両親は小さい妖精みたいだねといっていました。使用人たちはおばあさんが大嫌いでした。羽根ばたきではたい一つところから追い払っても、すぐにまた別のところに現われるからです。

おばあさんはいつも灰色の汚いドレスを着てすそを長くひきずっていました。そして、黄ばんだ髪の毛がぼさぼさした頭のまわりには、薄いヴェールのようなものをかぶり、ちょっとでも風が吹こうものなら、ひらひら漂うのでした。とてもいじめられているのでかわいそうに思いますが、花がたいそう傷つくことは分かっているのに、喜んでわたしの小さい庭で休ませてあげました。わたしはよくおばあさんとおしゃべりをしていましたが、常識のある言葉は一言も聞きだ

すことはできませんでした。何にでも触れたがっては、ただいいことをしているだけだよっていいいます。人々はわたしがおばあさんに寛大すぎるといって非難し、そして、近づくままにしておくと、体を洗って着替えに行かされ、わたしにも彼女と同じ名前をつけてやるとおどかされたりしたものです。

それはわたしがとても恐れていたいやな名前でした。おばあさんはひじょうに不潔だったので、家や通りのごみの中に寝たのだといわれ、そのせいで埃の妖精という名前がつけられていたのです。

「あなたは一体どうしてそんなに埃だらけなの？」ある日、おばあさんがわたしにキスをしたがった時、聞きました。

「わたしを恐れるなんてばかだねえ」と、その時、おばあさんは冷やかすような口調で答えました。

「おまえはわたしの身内だよ。だからおまえが思っている以上に、おまえはわたしに似てるのさ。でもおまえは何も知らない子供だから、説明していたら時間の無駄になるだろうよ」

「あらあら」と、私は答えました。「初めてもっともな話をしたがつているようね。あなたの言葉をわたしに説明してくださいな」

「ここではおまえに話せないよ」と、彼女は答えました。「話せば長い長い話になるんだよ。それに、おまえの家のどこかに身を落ち着けるとすぐに、馬鹿にされて掃かれちゃうから。でも、わたしが誰であるか知りたいのなら、今晚寝てからすぐに三回わたしの名前を呼んでおくれ」

そういうと、おばあさんははじけるような笑い声をあげて遠ざかりました。その姿がすうっと解けて、金色の大きな尾が夕日に赤く染まり、空高くのぼって、消えて行くのをわたしは見えたような気がしました。

その日の晩、わたしはベッドの中で眠くなりはじめたころ、埃の妖精のことを考えました。

「あれはみんな夢だったのかしら？」と、わたしはひとりごとをいいました。「それともあの小さいおばあさんは、ほんとうは頭がへんな人？ 眠っているのにどうしてあの人を呼ぶことができるっていうのかしら？」

わたしは眠りにつきました。するとすぐに、その名前を呼んでいる夢を見たのです。「埃の妖精、埃の妖精、埃の妖精」と、三回大声で叫んだかどうかさえ確かではありませんでした。

ちょうどその瞬間、わたしは巨大な庭の中に運ばれていました。庭の真ん中には魔法のお城がそびえ立ち、夢のような住まいの入り口に、若さと美しさに輝く貴夫人がお祭りのすてきな衣装を身に着けてわたしを待っていたのです。

わたしは夫人にかけよりました。すると彼女はわたしにキスをしてこういいました。

「じゃあ、今、おまえは埃の妖精のことが分かったのですね」

「いいえ、全然、奥様」とわたしは答えました。「だってあなたはわたしをからかっていらっしゃると思いますもの」

「少しもからかってなんかいませんよ」と彼女は答えました。「でも、わたしの言葉が理解できないでしょうから、これからある見せ物を見に連れて行ってあげます。それはおまえには不思議に見えるかもしれませんが、できるだけ短くしておきますから。ついていらっしゃい」

貴夫人は自分の住まいの一番美しい場所にわたしを連れて行ってくれました。それは小さな澄んだ湖で、まるで花の輪の中にはめ込まれた緑色のダイヤモンドのようでした。オレンジ色や紅玉髓⁹⁾のさまざまな色合いを帯びた魚や、琥珀色の中国の鯉、白鳥と黒鳥、宝石を身につけた異国情緒のある小鴨も遊んでいました。そして水底には、螺鈿や緋色の貝や、あざやかな色でぎざぎざの羽飾りをつけた山椒魚がいました。とにかく、いきいきとした驚異の世界のすべてが、銀色の砂の水底ですべったり飛び込んだりしていました。そこには細かい草が生え、きれいな花がたがいに咲き誇っていたのです。この巨大な泉水のまわりには、何列かの柱の上に雪花石膏¹⁰⁾の柱頭¹¹⁾のある斑岩¹²⁾でできた柱廊¹³⁾が丸く円を描いていました。もっとも貴重な鉱物で作られているエンタブレチュア¹⁴⁾はクレマチスやジャスミン、藤、ブリオニア、そしてすいかずらの下にほとんど隠れ、そこには数かぎりない鳥が巣をつくっていました。あらゆる色合いとあらゆる香りのバラの茂みも、その姿を水に映していました。アーケードの下では、パロス島¹⁵⁾の大理石でできた美しい彫像と円柱も同じように水に映っていました。泉水の真ん中からは噴水がダイヤモンドや真珠をいっぱいちりばめた打ち上げ花火のようにわき出では、広々とした螺鈿の水盤の中にまた落ちていました。建物の階段段数の底は、花や果物でおおわれた巨大な木々が影を落としている華やかな花壇に通じていました。そして、その木々の幹に葡萄の枝がからまり、斑岩の柱廊からむこうは、緑と花でできた柱廊を形づくっていたのです。

妖精は洞窟の入り口のところで私を自分の側に座らせました。そここのところから、美しい音を立てて滝が流れ出している洞窟は、美しい羊歯のリボンや水滴をダイヤのようにちりばめたみずみずしい苔のピロードですっかりおおわれているのです。

妖精はわたしにいました。「おまえがそこに見ているものはすべて、わたしが作ったものです。みんな埃でできているのですよ。雲の中でドレスの埃を払い落として、わたしはこの天国の材料を全部生みだしたのです。わたしの友達の花が材料を空気の中に投げると、わたしのしもべの風が雲の湿気と電気の中にそれを選び、大地に吹きおろした後に、火はまたそれを取りあげ、再び焼きなおし、結晶にし、あるいは固めたのです。それでこの固まった台地はわたしの豊かな本質を身にまとうと、雨がそれを花崗岩、斑岩、大理石、金属、あらゆる種類の岩石にしたのです」

わたしは理解できないまま聞いていましたが、妖精がわたしをずっと煙りにまいて

とっていました。妖精が大地を埃で作ることができたのは、まあいいとしても、埃で大理石や花崗岩、そのほかの鉱物を造って、体を揺すって空から落とされたかもしれないなんて、そんなことはちっとも信じられませんでした。あえて反対はしませんでした、こんな馬鹿げたことを本気でいっているのかどうか確かめるために妖精の方をふりむきました。

後ろにはもう誰もいないのを知ったときのわたしの驚きと叫びたら！でも、地面の下からひびく妖精の声がわたしを呼んでいるのが聞こえました。と同時にわたしもまた、いやおうなしに地下に入り込んでしまっていたのです。そして、すべてが火と炎に燃える恐ろしい場所にいるのに気づきました。地獄の話聞いたことがありますが、それこそまさにこの場所だと思いました。赤色、青色、緑色、白色、紫色の光がきらめき、あるときにはぶく鉛色に、あるときはピカピカ輝いて陽の光のかわりをしていました。それに、もし太陽がこの場所に差し込んでも、大かまどから立ちのぼる水蒸気ですっかり見えなくなっただけでした。

ものすごい音や、鋭くヒューヒュー鳴る音、爆発、雷の稲妻が、黒雲たちこめるその洞窟いっぱいになり、わたしはそこに閉じ込められているのを感じました。

そんなもの全部の真ん中に、わたしは小さい埃の妖精がいるのに気づきました。顔はもとどおり泥だらけで、さえないみすぼらしい服を着ていました。妖精は行ったり来たり、働いたり、押しついたり、詰め込んだり、かきまぜたり、どんな酸かかわからないけれど注いだりして、要するに、わけの分からない操作に熱中していたのです。

「怖がるんじゃないよ」妖精は、あのタルタロス¹⁰の耳をつんざく音をも圧倒するような声でわたしにいいました。「おまえはここ、わたしの実験室にいるのだよ。おまえは化学を知らないのかい？」

「化学については少しも知りません」と、わたしは叫びました。「だからこんな場所で化学を教えたがらないでください」

「おまえのほうを知りたがったのだよ。観念して見なければならぬよ。土地の表面に住み、花や、飼育された鳥や動物たちとともに暮らすのはとても便利なことだよ。穏やかな水の中で泳いだり、芝生やひなぎくのじゅうたんの上を歩きながら、おいしい果物を食べたりすることも。人間の生活が、ずっとこんなふうに恵みある条件のもとで続いてきたと、おまえは思っているのだ。今や、ものの始まりと、おまえの祖母であり、母であり、そして乳母である埃の妖精の力に気づく時がきたんだよ」

こう話しながら、小さいおばあさんは地獄の一番深いところと一緒に連れ回しました。焼き尽くす炎や、恐ろしい爆発や、黒い、えがらっぽい煙りや、解けた金属、恐ろしく噴出した熔岩、そして火山の噴出のあらゆる恐怖を通り抜けながら。

「これがわたしのかまどだよ」と、小さいおばあさんはわたしにいいました。「わたしの貯蔵物が仕上げられる地下室だよ。ね、いいかい、体と呼ばれているあの殻を脱ぎ捨てた精神に

とって、ここはいい気分だよ。おまえが体をベッドに脱ぎ捨てると、おまえの精神だけがわたしと一緒にいることになる。だから、おまえは原料にさわり、かき混ぜることができるのさ。おまえは化学を知らないのだから、この材料が何でできているのか知らないし、固体の姿でここに現れているものが、どんな秘密の操作によって気体から生じ、星雲のように空中で輝いたのちに太陽のように輝いたのかも知らない。おまえは子どもだから、おまえに創造の偉大な秘密を明かすことはできないよ。おまえの先生たち自身を知るまでにはまだ時間がかかるだろうしね。でもわたしの料理法を使ってできた産物を見せてあげることができるよ。おまえにとって、ここではみんな少しこんがらがっている。また上の階に上がってみよう。階段をおのぼり、そしてわたしについておいで」

それまで上段も下段もわたしが気づかなかった階段が、本当にわたしたちの前に現れました。妖精のあとをついて行くと、ふたりとも闇の中に入っていたのですが、そのとき彼女がまるで松明のように光り輝いているのに気づきました。そのせいでわたしは、ばら色の練り粉状の巨大な堆積物と、白っぽい結晶の固まりと、黒く輝くガラス状の物質の広大な大波を見たのです。妖精はそれらを指でつぶし始め、つぎに水晶をちいさい粒に砕き、全部をばら色の生地に混ぜ、とろ火と自慢げに呼んでいるものの上にかざしました。

「あなたは一体どんな料理を作るのですか？」と、わたしは妖精に聞きました。

「おまえの哀れな小さい存在にとって、とても必要な料理だよ」と、妖精は答えました。「わたしは花崗岩を作るんだ。つまり埃から、石の中でもっとも固い、もっとも強いものをね。地獄のコキトス河とプレジエトン河¹⁷⁾を閉じ込めるには、まさにそれが必要なんだよ。わたしは同じ元素でさまざまな混合物も作る。おまえ、見せてもらったことがあるだろう。ここに珪岩、片麻岩、滑片石、雲母片岩、などあかぬけない名前と呼ばれている石がある。わたしの埃からできているこれら全部の石から、あとで新しい元素を使ってほかの埃も作るつもりだよ。そうすると今度は石盤岩、砂、砂岩となるんだよ。わたしは仕事が巧みで、我慢強い。再び固めるために、たえずみじんを砕くんだよ。どんなお菓子も土台は小麦の粉でできているのではないかね？ 今はとりあえず、かまどは閉めておいたけれど、すべて爆発しないように必要な換気窓はいくつかとりつけておいたさ。何が起きているのかもっと上に見に行こうかね。もしおまえが疲れているならひと眠りしてもいいよ。というのはこの仕事にはもう少し時間がかかるからねえ」

わたしは時間の感覚を失っていました。そして妖精がわたしの目を覚ましたとき、

「おまえ、眠っていたのですか？ 何世紀もの間にわたって」と、妖精はわたしにいいました。

「一体どれくらいの間ですか？ 妖精の奥方さま」

「それについてはおまえの先生たちにお聞きなさい」と、妖精はにやにや笑いながら答えま

した。「階段をまたあがりましょう」

妖精はさまざまな堆積物でできた階段を何段もわたしにのぼらせました。わたしはその場所で妖精が金属の錆を取り扱っているのを見ました。その錆から彼女は石灰岩、泥灰土、粘土、碧石を作ったのです。そして、わたしが金属の起源について尋ねると、

「おまえはそれがとても知りたいのですね」と、妖精はわたしにいいました。「おまえの研究者たちは、水と火によってたくさんの現象を説明することができます。でも、かれらは大地と空の間で起こったことを知る事ができるでしょうか？ わたしの火山灰がすべて深淵の風によって噴き上げられ、大雲の固まりを作ったとき、その固まりを水の雲が嵐の渦巻の中で転がし、雷が神秘的な磁石によって入り込み、それから上空の風がそれを滝のような雨で地上に吹き下ろしたりすることを。それこそが最初の堆積物の起源なのです。これからおまえはそのすばらしい変移に立ち会います」

わたしたちはもっと上にのぼりました。そして白亜、大理石、そして地球全体と同じくらい大きい町を作るのに足る石灰石の層を見ました。そして、妖精がふるいにかけて、固め、変成作用をし、焼いて作ることができたものに驚嘆していると、妖精はわたしにこういいました。

「ここにあるものはみんななんでもないので。だからほかのものをよく見るのですよ！ これらの石の真ん中で、もう開花している生命を見るのです」

妖精は海のように大きい泉水に近づきました。そして腕を突っ込むと、まずそこから奇妙な植物を、つぎに、さらにもっと奇妙な生き物を引き抜きました。それはまだ半分植物でした。それから、互いに独立している自由な生き物、生きている貝、つぎにやっとならぬ魚を、こういいながら飛び出させたのです。

「ほらここに埃夫人が水の底に降りた時作ることができたものがあります。でも、もっといいものがあるのですよ。ふりむいて、そして岸を見てごらんください」

わたしはふりむきました。石灰岩と、珪岩や粘土が混じった石灰岩化合物全部が、褐色のねばねばした細かい埃をその表面に形づくっていました。そこにはひどく不思議な植物がふさふさと生えていたのです。

「これは腐植土なのです」と、妖精は言いました。「少しお待ちなさい。木が生えてくるのが見られますよ」

実際、わたしは高い樹木のような植物が急にそびえ立ち、蛇や昆虫が一杯になるのを見ました。いっぽう川岸には見知らぬ生き物が動き回っていました。

「この動物たちは、未来の地上ではおまえを怖がらせることはないでしょう」と、妖精はいいました。「かれらはその抜け殻によって大地を肥やすよう定められています。ここにはまだそれを恐れる人間はいません」

「待ってください」と、わたしは叫びました。「ここにはわたしの眉をひそめさせるたくさ

んの怪獣がいます。ここではあなたの土地は、他のものの命を食って生きるあの貪婪なものたちのものです。わたしたちに堆肥を作るために、あなたはこうしたすべての虐殺と愚かさを必要としたのですか？ 怪獣が堆肥以外のものに役に立たないということは分かりますが、生きものの形をしたこんなに豊かな創造物が、どうして何にも役に立たず、値打ちのあるものを何も残さないなんて理解できません」

「肥料は大したものですよ。実は一番大切なものではないでしょうか」と、妖精は答えました。「肥料が作る条件が、恵みぶかい源となって、別の生き物たちが怪獣を受け継いでいくのです」

「じゃあ、今度は誰が消えるのか、わたしは知っています。創造が人間にまできてから完成するのを知っています。少くともそう言われてきましたし、またわたしはそう信じています。しかし、わたしを恐れさせ、嫌悪を催させるこの生命と破壊の浪費癖を、わたしはこれまで想像したことがありませんでした。この忌まわしい形をしたものたち、巨大な両棲動物、恐ろしいワニ、そして這う生き物や泳ぐ生き物はすべて歯を使って他のものをむさぼり食うためにだけ生きているのでは……」

わたしが憤慨すると、妖精はとても面白がりました。

「物質は物質なのですよ」と、妖精は答えました。「物質の働きはいつも論理的です。人間の精神はそうではありません。その証拠に、おまえは魅力的な鳥や、物質の働きよりも美しく、賢いたくさんの生物に養われているのです。たえまない破壊のない生産など少しもないとおまえに知らせるのがわたしの役目なのでしょう？ それなのに、おまえは自然の秩序をひっくりかえしたいのですか？」

「ええ、できることならそうしたいのです。最初の日からすべてがうまくいってほしいものです。もし、自然が偉大な妖精ならば、うまく、こんないやな試みなしにすまずことも、またわたしたちが天使であり、精神がはつらつとしていて、ずっと変わらず美しい創造に包まれた世界を作ることでもできたのですもの」

「自然という偉大な妖精は、それ以上の目標を持っています」と、妖精は答えました。「自然はおまえが知っているものの前で立ち止まるつもりはないのです。自然は働き、たえずものを作り出します。生命の停止を知らない自然にとって、休息は死となるでしょう。もしも、ものが変化しなければ、天才たちの王による仕事も終わり、たえまなく最高の行動をするこの王も仕事とともに終わるところなのですが。おまえが暮らしていて、過去の幻影が消えたら、あとでもどるつもりでいるこの世界は、——この人間の世界は、古代の生き物たちの世界よりは良いとおまえは信じていますが、おまえはそれに満足はしていませんね。というのは、おまえはそこで純粋な精神の状態のまま永遠に生きたいと望んでいるのでしょうか。このかわいそうな、まだ子供の惑星は、際限無く変化する定めになっているのですよ。未来は、弱い人間で

あるおまえたちみんなから、科学や理性や善意を所有するようになる妖精や天才たちを作ら
しょう。わたしがこれからおまえに見せてあげるものをごらんください。そして本能の中に凝縮
されたこれらの最初の芽生えが、いつかおまえの住んでいる地上で精神を支配するものよりも、
おまえに近いことをお知りください。だから、あの未来の世界の居住者は、今日おまえが大トカ
ゲの世界を無視しているのと同じくらいひどくおまえを無視する権利を持つことになるのです
よ」

「まあ、よかった」と、わたしは答えました。「過去について見るもの全てが、わたしに未
来を好きにさせてくれるというのであれば、新しい事を見続けましょうよ」

「それでとくに」と、妖精は答えました。「この過去のことなのですが、これを無視しすぎない
ようにしましょうね。現在を無視するという恩知らずな行いをしないために。生命の偉大な
精神がわたしが供給した材料を使う時、精神は最初の日からすばらしいものを作ります。あな
たの学者たちがジュラ紀の魚竜と名付けているこのいわゆる怪物の目を見てごらんください」
「かれらはわたしの頭より大きくてわたし怖いです」

「魚竜の目はおまえの目よりひじょうに優れているのですよ。彼らは近視であると同時に自由
に遠視になります。望遠鏡のように、かなりの距離にある獲物を見つけますし、またごく近
くにいるときはたんに機能を換えるだけで眼鏡の必要もなく、実際の距離が完全に分かるので
す。創造のその瞬間に、自然はひとつの目的しか持ちません。考える動物を作るということで
す。自然は動物に、驚くほどその要求にぴったりした器官を与えるのです。それは美しい始まり
です。おまえはこのことに心打たれないでしょうか？——器官を受け継ぐすべての生き物につ
いて事情は同じで、しかもだんだん良くなっていくのです。おまえにとって貧しく、醜く、
あるいはひよわに思えたものたちも、かれらが現れるはずの環境に適応するという奇跡が起
こるのです」

「では、それはそうだとすると、動物たちは自分の身を養うことしか考えていないのではな
いでしょうか？」

「かれらに何を考えていてほしいのですか？ 大地は称賛される必要を覚えません。空は今日
も、またこれからもずっと続くでしょう。人間たちの憧れや祈りは、空の輝きやその法則の
壮大きに何も付け加えることはありません。おまえの小さい惑星の妖精がその偉大な理由を知
っているのです。そのことは疑わないでおくれ。しかし、妖精がこの理由を予知したり予感す
る生物を作ることの責任を果たすなら、妖精は時の法則に従っているわけです。おまえはこの
ことを理解できません。なぜなら作用の本当の価値を認めるにはおまえはあまりにも少ししか
生きていないからね。おまえはその作用がゆっくりしたものだと信じていますが、それらは電
撃的な早さなのです。わたしはおまえの精神を弱さから解放し、数え切れない世紀の結果を
おまえの前に伝達させましょう。見てごらん、そしてもう理屈はいわないで。おまえにたいす

るわたしの心遣いをできるだけ利用しなさい」

わたしは妖精が正しいと感じました。そこでわたしは何ひとつ見逃すまいと、大地の様相の交代を注意して見ました。わたしは動物や植物が、その本能によってだんだん巧みに生まれたり死んだり、また形をとるにしたがってだんだん快適なものになったり、あるいは堂々としてくるのを見ました。土地が今日のものに似た生産物によって美しくなっていくにつれ、大きな出来事がたえず変化を与えるこの大きな庭の住人たちが、自分自身にたいする食欲さを無くし、子孫のことをもっと気遣うようになったと思われました。わたしは、かれらが家族用の住まいを建て、自分の町にたいする愛着を示すのを見ました。たえず、夢幻劇の幕のようにひとつの世界が消え、新しい世界が立ち現れるのを見ていたのです。

「休息しなさい」と、妖精はわたしにいいました。「なぜならおまえはそれと気づかずたくさん世紀に目を通したところですからね。そしてお猿さんの支配が完了してから、今度は人間さんが誕生するのです」

わたしは疲れ果てて再び眠りました。そして目が覚めたとき、わたしは宮殿の大きな舞踏会場の真ん中にいて、ふたたび若く、美しく、身をかざった妖精がいるのに気づきました。

「おまえはこれらの美しい物すべてとこの美しい世界すべてを見ていますよね」と、彼女はわたしにいいました。「ところが、おまえ、これらはみんな埃なのです！ この斑岩と大理石の岩壁は埃の分子が適度に固まり焼けたものからできています。この刻まれた石の城壁は同じ方法で首尾よくあんばいされた石灰と花崗岩の埃からできたのです。このシャンデリアとクリスタルガラスは自然の仕事をまね、人間の手によって細かい砂が焼かれたものです。この磁器と陶器は中国人がその用法をわたしたちに発見させた長石と高陵土の粉からできているのです。踊り子を飾るダイヤモンドは石炭の粉が結晶になったものです。これらの真珠は真珠貝が貝の中で染み出させた磷酸石灰です。金とすべての金属については、ごく微小の分子が、ひじょうに圧縮されたり、うまく操作され、よく溶け、とても熱くされたり、冷たくされたりして、寄せ集められたもの以外ほかの起源は持ちません。これらの美しい植物、肌色のバラ、斑点のあるユリ、芳香を放つクチナンは、わたしがそれらに用意した埃からできています。そして楽器の音色に合わせて踊ったり、ほほ笑んだりしている人々、人と呼ばれこの上もなく生き生きしている者、かれらもまた、お気にはめさないでしょうが、わたしから生まれ、そしてわたしに戻るのです」

彼女がそういったとき、お祭りと宮殿は消えました。わたしは妖精とともに小麦の生えている野原にいるのに気づきました。彼女はかがんで、貝がはめ込まれている石をひとつ拾いました。

「ほら」と、彼女はわたしにいいました。「これは化石の状態です。生命の最初の時代にわたしがおまえに生きた状態で見せた生物の化石です。今は、何になっているのでしょうか？ 燐

酸石灰です。それは埃に帰り、あまりにも珪土質すぎる土地にたいする肥料となるのです。分かりますか、人間はあることに気づき始めました。学ぶべき唯一の主人、それが自然なのです」

彼女は指の下で化石をつぶしました。それからこういいながらその粉を耕された地面にまきました。

「これはわたしの台所に戻ってきます。わたしは芽を出させるために破壊の種をまき散らします。植物であれ、動物であれ、あるいは人であれ、どの埃についても事情は同じなのです。埃は生命を得た後、死にますが、それは何ら悲しいことではありません。わたしのお陰で死んだ後はいつも、ふたたび生命が始まるのですからね。さようなら。わたしの思い出を持っていてほしいです。おまえ、わたしの舞踏会の衣装にたいそう見とれていますね。ここにその切れ端がありますから心ゆくまでおためしなさい」

すべては消え、目が覚めたとき、わたしはもとのベッドの中にいました。太陽は昇り、わたしに美しい光りを投げかけていました。わたしは妖精が手の中においてくれた布のきれ端を見ました。それはうっすらと積もった細かい埃でしかありませんでした。しかし、わたしの精神はまだ夢の魅力に捕らえられ、この埃のもっとも小さい原子の粒をも見分ける力をわたしの感覚に伝えていたのです。

わたしは感動していました。すべてのものがありませんでした。空気、水、太陽、金、ダイヤモンド、灰、花粉、貝、真珠、蝶の羽の鱗粉、くもの糸、蠶、鉄、木、微細なたくさんの死骸。しかし、これらの目に見えない死骸の混じったものの真ん中で、わたしはとらえ難い生き物のなにかの生命が発酵しているのを見ました。それは花開き、あるいは変化するためにどこかに落ちてこうとしているように思われましたが、日の出のぼら色の光りの中で金色の雲となって消えていきました。

【テキスト】

George Sand, "La Fée Poussière", *Contes d'une grand-mère*, t. II, Editions d'Aujourd'hui, 1977. (Le texte de cette réédition est conforme à celui de l'édition Calmann-Lévy de 1878.)

George Sand, "La Fée Poussière", *Contes d'une grand-mère*, Deuxième série, Editions de l'Aurore, 1982.

【註】

- 1) "La Fée Poussière", *Contes d'une grand-mère*, Edition de l'Aurore, Deuxième série, p.22. 引用はこのテキストによる。和訳は筆者。以下同じ。
- 2) "La Reine Coax", *Contes d'une grand-mère*, Edition de l'Aurore, Première série, p.137. 拙訳『コアッ

クス女王』青山社、1992、p.64.

3) “Le nuage rose”, *Contes d'une grand-mère*, Edition de l'Aurore, II, p.144.

4) < poussière > は埃、塵、粉末、遺骸、なきがら、ごみなどの意味がある。すべて < 埃 > に統一して訳したが、場合によってはそれぞれのニュアンスを含んでいる。サンドは少女時代に、ジェルソン Jean Charlier, dit Gerson (1363-1429 神学者) 『キリストのまねび』 *L'Imitation de Jésus-Christ* とシャトールリアン François-René, vicomte de Chateaubriand (1768-1848) の『キリスト教精髓』 *Génie du christianisme* の間で悩み、修道院の告解者ブレモール司祭に手紙を書いたことがあった。ジェルソンは《泥と塵にならん》、シャトールリアンは《炎と光にならん》と忠告している。サンドはこの時期は、結局後者に傾いた。その後ルソー Jean Jacques Rousseau (1712-1778) の『エミール』 *Emile* (1762) に出会い、絶対的な平等と博愛を要求する真のキリスト教を求め得たと信じた。

cf. George Sand, “Histoire de ma vie”, *Œuvres autobiographiques*, I, Gallimard, 1970, p.1039 « Apprenez à obéir, poussière que vous êtes! apprenez, terre et boue, à vous abaisser sous les pieds de tout le monde. »

5) “La Fée Poussière”, pp.162-163.

6) *Contes d'une grand-mère*, Edition de l'Aurore, Deuxième série, p.26.

Visiblement imprégnée d'optimisme darwinien, George Sand s'enchantait à dérouler la vision rétrospective de toute l'aventure — la poussière engendre les plantes, qui engendrent les poissons, qui engendrent les reptiles, qui engendrent les hommes — .

7) George Sand, *Correspondance*, Classiques Garnier, 1985, Tome XX, p.196, p.204, p.213, p.214, 1866. Novembre 21-22., 29 1866. decembre 4.

8) George Sand, *Agendas*, Jean Tousot Libraire-Editeur, 1992, N, pp.96-97, 1868. Avril 21.

9) cornaline [鉱物] 紅玉髓。

10) albâtre [鉱物] 雪花石膏。

11) chapiteau [建築] 柱の頭、とくにギリシア・西洋建築で、彫刻のある柱の上の部分。

12) porphyre [鉱物] 斑岩。

13) colonnade [建築] 柱廊、列柱、コロネード。

14) entablement [建築] エンタブレチュア、古典建築の柱頭から軒上端までの間の部分。

15) Paros パロス島はギリシアの島の名前、キュクラデス諸島(エーゲ海の中の諸島)の建築において、古代彫刻に使用された白大理石によって有名。

16) Tartare (le) [ギリシア神話] タルタロスは地獄、奈落の底。

17) コキュトス Cocyte 河、プレジエトン Phlégéon 河 [ギリシア神話] ステュクス Styx 河、プレジエトン河、コキュトス河は地獄の三つの河。